

服部英雄先生と九州大学大学文書館

折田, 悦郎
九州大学大学文書館 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1508410>

出版情報 : 歴史を歩く時代を歩く : 服部英雄退職記念誌 : とことん服部英雄, pp. 343-344, 2015-03-31. 九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室
バージョン :
権利関係 :



服部英雄先生と九州大学大学文書館

折田 悦郎

服部英雄先生が二〇一五年三月で九州大学を定年退職される。「定年退職」は以前は「停年退官」と書かれ、昭和五〇年代までは翌年度の四月一日付の退官も見られたが、先生の場合はおそらく三月三十一日付のはずである。まずは「誠に有り難うございました」と御礼を申し上げたい。

私が先生のお名前を知ったのは、先生が『史学雑誌』に書かれた相良氏か人吉庄の論文を通じてのことだったと思う。論文の発表年からみて一九七〇年代末のことだろう。中世史の先輩が良い論文だと評するのを国史学研究室で聞いた。しかし、九大大学院比較社会文化研究科に來られるまではご尊顔を拝したことはなかった。最初にお話したのは、六本松の学生会館近くにあった九大生協書籍部のことだったと記憶する。先生からお声を掛けていただいたのである。偉い先生だったのだからと緊張したが、大変気さくな方だった。こうなると調子にのるほうなので、その後は何度かお話をさせていただいた。

なかでも一番印象深いのは、六本松キャンパスの移転に際して作られた『青春群像』さようなら六本松 一九二一福高—九大二〇〇九』の編集作業をお手伝いさせていただいたことである。大学文書館に旧制福岡高等学校と旧教養部関係資料が所蔵されているということで、巻頭に拙論「旧制福岡高等学校と新制九州大学教養部」を載せていただいたが、旧制高校制度や福岡高等学校、旧教養部の歴史を改めて勉強することができた。それは「九州大学六本松キャンパス跡地まちづくりコンセプト委員会」の委員を務めたときや、大学文書館が中心になって行っている「九大の歴史」のゼミ、講義に大いに役立った。授業中に旧制高校生活をえがいたDVD「北

辰斜にさすところ」を観覧するのも、同書の編集がきっかけである。それから、この編集時に先生の歴史研究法を間近に見ることができたことも大切な経験となっている。地名研究や聞き取り調査のやり方など、古い時代の景觀等を復元される手法には驚愕した。福高・九大関係者に直接、あるいは電話、手紙で聞き取り・質問をされ、それを当日夜にはもう文章にして返信される。中世史の瀬野精一郎先生が、私に「一つの大きな才能です」と言われたのにも納得がいく。ぜひ『九百年史』のほうにもお力をいただきたいと（引きずり込もうと）お願いしたが、これは叶わなかった。その後、比較社会文化研究院院長を務められたことを考えれば、賢明なご判断だったと思う。『さようなら六本松』の編集では、締め切りを過ぎてから藤岡健太郎「六本松キャンパス概略史」の掲載をお許しいただいた。これにも両人大変感謝している。

先生の研究室には六本松、伊都両方ともに何度かお伺いしたが、私の部屋とどこいってこいに散らかっている。ときにはビニール袋に入った「米」⁽¹⁾があたりに置かれていたりした。登山用だとは思いますが、「学内居住者」的生活でもされておられたのだろうか。伊都キャンパスに九大初代総長山川健次郎の胸像が建立され、その除幕式に山川関係の方々が来学されたが、山川のご曾孫木下健氏は東大ポート部で先生の一年先輩にあられるという。先生が私にとつてはどこか兄貴分的な存在に感じられるのは、このポート部出身のせいかもしれない。

本日（十二月二十五日）の朝日新聞朝刊で、著書『蒙古襲来』（山川出版）の広告が一面トップに掲載されていた。前著の『河原ノ者・非人・秀吉』も大変面

白かったが、『蒙古襲来』も面白そうである（「神風」が吹いた！果たしてそれは真実か？）。早速購入して拝読したいと思う。

先生のますますのご活躍とご健勝を祈念して擱筆したい。

（1）この「米」については、服部先生から「田染庄園米で、院生にも共同出資をお願いし、米の配分をしていた。」¹「自身は補助金を出されていた」旨、²教示があった。したがって単なる「学内居住」用米ではない。

（九州大学大学文書館教授）